

ウズベキスタン共和国科学アカデミー  
東洋学研究所所蔵コレクション  
——イスラーム文化の諸問題の研究におけるその意義——

ヌールヤグディ・タシェフ  
木村 暁 訳・解説

はじめに

ウズベキスタン共和国科学アカデミーのアブー・ライハーン・ビールーニー名称東洋学研究所は、1943年ウズベキスタン国立国民図書館（現在のアリーシール・ナヴァーイー名称国立図書館）の東洋セクションを基礎にして創立された。それは1950年までは東洋写本研究所と呼ばれていたが、そこで実施される研究が多岐の分野にわたっていることにかんがみ、同年、その名称は東洋学研究所と改められた。

東洋学研究所はウズベキスタン科学アカデミーに属する一機関である。科学アカデミーの構成下には50以上の研究所（うち3つは博物館）があり、それらは学術研究のあらゆる領域、すなわち、自然科学、精密科学、人文・社会科学の諸分野をカバーしている。これらの研究所は学術研究機関として位置づけられており、教育課程は設けられていない。しかし、大学など高等教育機関の学生は、関係分野の研究所において研究活動に取り組むことができる。また、科学アカデミーの諸々の研究所の研究員が高等教育機関において授業をおこなうケースもよく見られる。

東洋学研究所には100名近くの職員が勤務し、うち56名が研究員である。研究員の大部分は若手が占めている。ここ3～4年にかけては、若者が研究の道に進むという動きが若干ながら活発化しているように見受けられる。

東洋学研究所における学問研究は、基本的には次の4つの枠組みのもとでおこなわれている。

- (1) 写本と文書のカタログ化、すなわち解題の編纂
- (2) 史料のウズベク語およびロシア語への翻訳
- (3) 歴史研究
- (4) 現代的諸問題（おもに、東洋諸国の現在の変容プロセス、および中央アジアと東洋諸

## 国の政治的・外交的・経済的・文化的関係)の解明

### 東洋学研究所の所蔵コレクション

まず、フォンドの形成の経緯とその構成について簡単に述べておこう。東洋学研究所の写本の収集・蓄積作業の端緒が開かれるのは19世紀の第4四半世紀のことであり、これ以降、当時再編を経ているタシュケント公共図書館に東洋写本が搬入されるようになった。1944年1月、前述のウズベキスタン国立国民図書館の東洋セクションを基盤として東洋写本研究所在所が創設され、1950年、それは東洋学研究所と改称され、さらに1957年にはアブー・ライハーン・ビールーニーの名称が与えられた。

現在、東洋学研究所には以下のような文献遺産のフォンドが存在する。

#### ①基盤フォンド（これは便宜的に付された仮称である）

当フォンドには13,319点の写本が収蔵されている。このフォンドの基礎をなすのは、その大部分がロシア革命期以前の学者や為政者、その他の愛書家であるところの個人の蔵書コレクションに収められていた写本である。これら個人の蔵書コレクションはそれぞれの時期にさまざまな経緯を経て、前述の公共図書館にもたらされた。そうしたコレクションのうち最大の意義を有するものとしては、ホージャ・ムハンマド・パールサー *H'āja Muḥammad Pārsā* の文庫や、ブハラのアミール・ムザッファル *Amīr Muẓaffar* の息子、ムハンマド・スイッディーク・ヒシュマト *Muḥammad Šiddīq Hišmat* の蔵書、あるいは、ムハンマド・シャリーフ・サドリ・ズィヤー *Muḥammad Šarīf Šadr Ziyā'*、ムハンマド・アリー・ドゥークチ・イーシャーン *Muḥammad 'Alī Dūkčī Īšān*、ユヌスジャーン・ホーカンディエー *Yūnus-jān Hūqandī*、ベクジャーン・ラフマーノフ *Bīk-jān Raḥmānūf*、アブドゥッラウーフ・フィトラト *'Abd al-Ra'ūf Fiṭrat* らの個人蔵書を挙げることができる。また、ヒヴァ・ハンの文庫の一部もこれに該当する。このほかにも、基本的には民間の個人からの写本の購入を通じて、フォンドの拡充が進められてきている。

#### ②二次フォンド

当フォンドには5,237点の写本が収蔵されている。ここには主として、おなじ作品を含む写本がすでに基盤フォンドに多数収蔵されている重複本である写本、あるいは甚だしい欠陥のある、いわば「見劣りのする」写本が集められている。もっとも、欠陥本はこのフォンドにのみ存在するわけではない。これら欠陥本の修復は研究所の焦眉の課題の1つとなっている。このフォンドの名称に付された「二次[的]な *dubletnyi*」という、場合によっては不名誉とも言う形容辞は、もちろん、このフォンドが注目にほとんど値しないということ

意味するものではない。しかしながら今までのところ、研究所の全フォンドのうち、この「二次フォンド」は研究対象として最も未開拓のフォンドにとどまっている。

### ③ ハミード・スライマーノフ名称フォンド

当フォンドには 7,586 点の写本が収蔵されている。これらの写本は 1998 年の写本研究所の閉鎖にともない、東洋学研究所に移管された。このフォンドの基礎を構成しているのは民間から買い取られた写本である。

### ④ 文書フォンド

当フォンドは私権や法律にかかわる証書やその他の、およそ 5,000 点の文書を収めている。その大部分は中央アジアの三汗国の支配期に属するものである。

さらにまた、研究所は東洋諸語で書かれた石版本その他の刊行物のフォンド、ならびにマイクロフィルム・フォンドも有している。このほか、個々のミニアチュールやカリグラフィーの臨本が 300 点ほど存在することも指摘しておかねばならない。当然ながらミニアチュールはいくつかの著作の写本中にも存在するが、とくにフィルダウスイー Firdavsi の『シャー・ナーマ *Šāh-nāma*』、一連の著名な詩人の詩集である『ハムサ *Ḥamsa*』、なかんずく『ユースフとズライハー *Yūsuf va Zulayhā*』のなかに多くみられる。医学や天文学などに関するいくつかの創作物にも挿絵が施されている。

このように研究所の写本の総数は 2 万 6 千点を越え、個々の写本はさまざまな判型を与えられている。それぞれが 1 つから数十の作品をそのなかに含み、百以上もの著作を含む写本も知られている。作品の総数は写本の総数の 3 倍ほどである、との見方が受け入れられているものの、この断定は写本 1 点につき 3 つの作品が含まれるという当て込みにもとづいており、そのような算定がきわめて概算的な性格をもつことは明らかである。さらに付言すれば、この場合、研究所の写本コレクションを取り扱う一連の出版物全般にみられがちな作品点数に関する議論はすべきでなく、今のところは、なかに含まれる作品の点数はまだ不明としつつ、写本の点数こそ話題にすべきなのである。

ほぼすべての写本をカバーするカード目録が存在し、それは所蔵番号、著者名、作品名、テーマごとに分類・配列されている。1952 年に『ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国科学アカデミー東洋写本集成 *Sobranie vostochnykh rukopisei Akademii nauk Uzbekskoi SSR*』という表題のもとでカタログの刊行がはじまり、それは以後数十年間にわたって、研究所の基盤フォンドの構成に関する、全世界の東洋学者にとっての唯一の情報源でありつづけた。このカタログの既刊の 11 巻には、7,500 点以上の作品の解題が含まれている。テーマ別およびそ

の他の一連のカタログも存在するが、おそらく、すでに目録化された写本の総数は全体の15～20パーセントを越えはしないであろう。

研究所の写本の圧倒的多数はアラビア語、ペルシア・タジク語、およびテュルク語で書かれており、パシュトゥー語、ウルドゥー語、またヘブライ語で書かれている写本もわずかながら存在する。言語の点で混成的な特徴を有する、集成の体裁をとる写本も多い。ある研究文献には、基盤フォンドの写本の約40パーセントをアラビア語が、もう40パーセントをペルシア語が、残りの20パーセントをテュルク語が占めている、との見解が示されているが、これらの概数は信用よりはむしろ疑念を引き起こすものである。

確信をもって断言できるのは、今述べたような写本と言語の相関性は時代とともに変化する、という一点に尽きる。この点で研究所の写本フォンドはイスラーム世界のいくつかの地域、たとえば中東で生じた諸現象を反映している。その1つがペルシア語によるアラビア語の駆逐であり、例を挙げるとすれば、それはとりわけ修史など広義の文学の分野において起こった。より後代になってから観察されるのがテュルク語の地位の高まりであり、そのさい、テュルク語はいくつかの特定の地域においてきわめて豊かな土壌を見出すことになる。たとえば、ヒヴァ・ハン国とコーカンド・ハン国で作成された写本は、そのかなりの部分がテュルク語で書かれている。写本が何語で書かれるかは多くの場合、テーマにも依存していた。たとえば、19世紀にいたるまで、フィクフ *fiqh* (法学) やカラーム *kalām* (神学) に関する著作の大部分はアラビア語で書かれており、これについては研究所の諸写本が証明している。

写本の地理的な出自もきわめて広範にわたっている。それは、中央アジア、東トルキスタン、インド、パキスタン、アフガニスタン、アラブ諸地域、トルコ、ザカフカース、ヴォルガ・ウラル地方を含んでいる。

コレクションがカバーする年代的な範囲は、10世紀から20世紀中葉にまで及んでいる(下限については20世紀初頭までという誤った指摘もしばしばなされている)。いくつかの情報によれば、クーフィー体で書き写されたクルアーンの写本は9世紀のもものとされる。しかし、これは厳密な調査にもとづいて確証を得ているわけではないように思われる。アブー・ウバイドゥルカーシム・イブン・サッラーム・アルハラヴィー *Abū 'Ubayd al-Qāsim b. Sallām al-Haravī* の『ガリーブルハディース *Ġarīb al-ḥadīṣ*』という著作の写本には、ヒジュラ暦344年(西暦955年に相当)という年が記されている。クルアーンのまた別の写本(13世紀頃)も非常に興味深いものであり、同書においてはアラビア語本文の各行の下にテュルク語とペルシア語の訳が付されている。研究所にはクルアーンのいわゆるカッタ・ランガル *Katta Langar* 写本の一葉も保管されており、それは権威ある専門家たちの見解によれば、8世紀のもものと比定されている。

イブン・ミスカワイフ Ibn Miskawayh の『タジャーリブルウマム *Tajārib al-umam*』(595/1199年の年号をもつ)、アブー・ハフス・ウマル・アンナサフィー Abū Ḥafṣ ‘Umar al-Nasaḥī の『マトゥラウンヌジューム・ワ・マジュマウルウルーム *Maṭla‘ al-nujūm wa majma‘ al-‘ulūm*』、また、『カリーラとディム *Kalīla wa Dimna*』(14世紀にバグダードで書写)、『マジュムーアイ・ムラーサラート *Majmū‘a-i murāsālāt*』(通称『ナヴァーイー・アルバム』)などの著作の写本はきわめて貴重である。おなじく貴重な写本としては、アブドゥッラフマーン・ジャーミー ‘*Abd al-Raḥmān Jāmī*、ムハンマド・カースィム・フィリシュタ Muḥammad Qāsim Firišta、アフマド・ダーニシュ Aḥmad Dāniš など、歴史上の著名人の自筆本も存在する。研究所に所蔵される目立った特徴を有する写本は枚挙に暇がない。基盤フォンド1つをとってみても、そこにおける315点の写本が、その古さ、希少さ、芸術的装飾の豊かさ、あるいは挿入されたミニアチュールにより、とくに貴重な写本として区別されている。

当然のことながら、いずれの写本コレクションであれ、その意義の大小は、そこに収められる写本が独自性をもつとか、希少であるとか、あるいは、きらびやかな装飾を施されているとかいう点によってのみ規定されるわけではない。何らかの創作物のたとえば第100番目の写本の場合であれ、芸術的な点においていかに平凡であろうとも、それが含みもつ読み手によって施された注釈は、周知のように、多くのことを物語る可能性があるという点で興味を惹起し、貴重なものとなりうるのである。

さらに、写本それ自体が過去の遺産として精緻な検討に値するものであり、この方面における研究の重要性については、ここでわざわざそれを証明するまでもなからう。写本の所有者による注記や印章からも重要な情報を抽出することが可能である。たとえば、ラズィー・アッディーン・アッサラフスィー Raḥī al-Dīn al-Saraḥsī の『アルムヒート *Al-Muḥīt*』という著作の一写本(所蔵番号557)における書き込みと印章からは、同写本がもともとオスマン朝スルタンのものであったこと、またそれがトルコからブハラにもたらされ、そこで1843年にブハラ・アミールの命令によってガーウクシャーン・マドラサ *Madrasa-i Gāvkušān* の文庫のワクフのために購入されたことがわかる。写本本体には、この写本がトルコとブハラのそれぞれにおいていくらで購入されたかが書き留められている。

16世紀以降の中央アジアと隣接諸地域の歴史研究にとって、研究所のコレクションは特別な意義を有しており、その価値は時代が下るにつれて増していく。16世紀から20世紀にかけての諸々の著作のうち、研究所にのみ伝存するものも少なくなく、それらは唯一写本(しばしば自筆本)の場合もあれば、複数の写本が存在する場合もある。当該時期の歴史に関しては、このほかにもドゥシャンベとサンクトペテルブルグの写本所蔵機関にそれぞれ重要なコレクションが存在する。

研究所のコレクションの特徴の1つは、混成的な内容をもつ写本が多いことである。そう

した写本においてはそれほど分量のない著作——おそらくは諸々の著作からの断片——が多数書き写されており、なかには全編を通じて、雑多で無秩序な書き込みやさまざまな著作からの抜粋、祈禱文、詩などから構成されている写本もいくつか存在する。そのような写本のほぼすべてがここ数世紀に属するものである。その意味において研究所のフォンドはおそらく、たとえばヨーロッパ諸国における東洋写本のフォンドとは趣を異にしている。ヨーロッパ諸国のフォンドには、基本的には専門家や他の人々によって精選されたうえで集められた、いわば「見栄えのよい」写本がもたらされたからである。彼らは入手した写本のすべてを持ち出すことはかなわなかったのである。

まさにこの混成的な写本の数々は総体として、ある重要にして興味深い現象を浮き彫りにしており、これを詳細に研究する可能性を与えている。ほぼ17世紀末以降、民間の口承文芸の遺産、すなわち宗教説話、詩、英雄叙事詩、伝説等の、文字による記録化がはじまる。なるほど宗教的な内容をもついくつかの創作物にはサイカリー Şayqālī、ハーリス Ḥāliş、その他の詩人のような著者が存在するのではあるが、これらの著者の功績はおそらく、すでに存在した伝統の文学的な焼き直しをおこなったという点に帰するであろう。以上のようなプロセスはとりわけ18世紀から19世紀にかけて顕著になる。たとえば、アフマド・ヤサヴィー Aḥmad Yasavī のいわゆる「ヒクマト hikmat」もの、あるいは、手工業にたずさわる職人の儀礼的慣行の次第書（いわゆる「リサーラ risāla」）の現存するすべての写本は、18世紀から20世紀初頭にかけての時期に属している。もっとも、むろんのことながら、それらはそれ以前にも存在していたはずである。このような第一級史料の分厚い地層は全体として、ほとんど手つかずのままである。

総じて、東洋学研究所の写本はきわめて広範にわたる諸問題の検討にとって豊富にして貴重な史料をわれわれに提供しており、新たな研究者の到来を待ちかまえているのである。

### 東洋学研究所における研究活動の近況

さて、東洋学研究所において現在実施されている、ならびに、実施が予定されている最重要の研究課題について簡潔に述べておこう。

研究所のフォンドは、世界において最も研究と学術利用の進んでいないフォンドの1つであると言っても過言ではあるまい。これにはいくつかの理由がある。一因を挙げれば、ソ連邦の崩壊以前、研究所のフォンドは外国人研究者に対してはほとんどまったく公開されていなかった。要するに、こうした諸々の理由を考慮に入れて、研究所では今後の優先的な研究課題として以下の3つの点が提起されている。

1. 研究所に所蔵される写本と文書の包括的な目録化
2. 未公開史料の学術的校訂テキストを（原文に忠実なかたちで）出版する取り組みの推進

3. 研究所において実施される研究が取り扱うテーマの拡大。とりわけ、文学にかかわる史料が多数存在し、それがほとんど研究されていない現状にかんがみての、文学史研究への本格的着手

第1の研究課題に関していえば、本年、われわれにとって長らくの念願であった事業を実行に移すことが可能となった（この事業の最大の難点は多大の経費を要することであった）。ドイツのゲルダ・ヘンケル財団から基盤ファンドに収蔵される写本の電子カタログ化のための助成金を得ることができたのである。このプロジェクトは5カ年にわたって継続することになっている。専門的な IRBIS 方式の検索プログラムに則って準備されるこの目録は、インターネット上に公開される予定である。

第2の研究課題に関しては、歴史とスーフィズムに関する諸著作の校訂テキストの編纂にかかわるプロジェクトが昨年開始された。そのうち、17世紀から19世紀までの5つの歴史書のテキストの出版については、ユネスコの創立になる在サマルカンドの国際中央アジア研究所（IICAS = International Institute of Central Asian Studies）とのあいだで契約書が調印された。この5作品は2009年から2011年にかけて、英語の序文を付して出版することが予定されている。

第3の研究課題の推進は人的資源の問題と結びついており、別の言い方をすれば、これはある程度の時間を必要としている。目下、この目的の遂行のために3～4名の若手研究者が採用されたところである。

（ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所上級研究員）

\* \* \* \* \*

## 訳者あとがき

ここに訳出したのは、2008年10月28日に東京大学本郷キャンパス（法文1号館113番教室）でおこなわれたヌールヤグディ・タシェフ（Nuryog‘di Iskandarovich Toshev）氏による特別講演の全文である。タシェフ氏はNIHUプログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点の招聘事業の一環で来日し、10月22日から31日までのあいだ東京に滞在した。この特別講演会は同拠点が主催したものである。この間、氏は第13回中央ユーラシア研究会・特別セッション「中央アジアのイスラーム王権」（10月25日；於東京大学本郷キャンパス法文1号館217番教室）に参加し、「ヒヴァ・ハンの称号 Xiva xonlari titulaturasi」と題する研究報告をウズベク語でおこなってもいる。

「ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所所蔵コレクション：イスラーム

文化の諸問題の研究におけるその意義」と題される本講演はウズベク語でおこなわれたが、講演の下原稿はもともとロシア語で書かれており、原題は“Znachenie sobranii Instituta vostokovedeniia Akademii nauk Respubliki Uzbekistan dlia issledovaniia voprosov islamskoi kul'tury”と銘打たれている（題目の日本語訳は便宜的に主題と副題とに分けて提示してある）。氏は今回の講演を準備するにあたってロシア語の下原稿にウズベク語で加筆し、講演本番では、ロシア語部分についてはその場でウズベク語に訳しながら原稿を読み上げた。本講演の訳文の作成は、ロシア語とウズベク語が併存する上記の下原稿にもとづいておこなった。なお、固有名詞や専門用語のラテン文字転写は訳者が補ったものである。タシエフ氏はこの講演に先立ち、2007年8月にウズベキスタンで開催された国際会議においてほぼ同一のテーマのもとで報告をおこなっており、その報告の要旨は同会議の既刊の報告集のなかに収録されている<sup>(1)</sup>。今回の講演では、「はじめに」と「東洋学研究所における研究活動の近況」の部分が新たに書き加えられ、このほかにも若干の改訂が施された。この講演の内容は、東洋学研究所の所蔵コレクションの概要について従来の根拠を欠いた解説への批判をまじえつつ紹介し、なおかつ収蔵写本群の知られざる特徴とその史料としての可能性を指摘する点でとりわけ興味深く、当該コレクションとその研究状況<sup>(2)</sup>をよりよく知るうえで一助となることは疑いないだろう。

さて、タシエフ氏についてやや詳しく紹介しておこう。タシエフ氏は1967年、ウズベキスタン共和国ブハラ州カラコル郡に生まれた。カラコルはウズベキスタンのなかでも教育熱心な土地柄で知られるが、タシエフ氏はそうした環境のなかで研究を志すようになった。タシエフ氏はタシエフ国立大学の東洋学部を修了し、1992年以来、科学アカデミーのアブー・ライハ

<sup>(1)</sup> N. Toshev, “Znachenie fonda rukopisei Instituta vostokovedeniia Akademii nauk Respubliki Uzbekistan dlia issledovaniia voprosov islamskoi tsivilizatsii,” *O'zbekistonning islom tsivilizatsiyasi rivojiga qo'shgan hissasi: Ta'lim, fan va madaniyat bo'yicha islom tashkiloti – ISESCO tomonidan Toshkent shahrining 2007 yildagi Islom madaniyati poytaxti deb e'lon qilinishiga bag'ishlangan xalqaro konferentsiyaga yo'llangan ma'ruzalar va ta'briklar tezislari to'plami*, Mas'ul muharrirlar: B. A. Abduhalimov, Z. I. Munavvarov, Toshkent–Samarqand, 2007, 318–321-betlar. 2007年にイスラーム教育科学文化機構（ISESCO = Islamic Educational, Scientific and Cultural Organization）がタシエフ国立大学を「イスラーム文化の首都」と宣言したことを記念して組織されたこの国際会議は、同年8月14日にタシエフ国立大学で、また翌15日にはサマルカンドで開催された。タシエフ氏の報告はタシエフ国立大学における「ウズベキスタンの古文書と文化的遺産、イスラーム文明共通の遺産」と題される部会でおこなわれた。

<sup>(2)</sup> 東洋学研究所の概要とそこでの比較的最近の研究状況については、以下の文献も参照されたい。久保一之「ウズベキスタンにおける中央アジア史研究の現状」『西南アジア研究』39, 1993年, 50–61頁；木村暁「ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所の現在」『日本中央アジア学会報』2, 2006年, 26–30頁；スライヤー・カリーモフ（木村暁訳）「ウズベキスタンにおけるイスラーム期文献史料の研究：成果と課題」『イスラーム地域研究ジャーナル』2, 2010年3月刊行予定。



ーン・ビールーニー名称東洋学研究所に籍を置くタシェフ氏は、主な関心をイスラムの歴史叙述、スーフィズムの歴史、および古文書学に据えながら、幅広い分野で研究を積み重ねている<sup>(3)</sup>。2004年にアラウウディーン・ジュヴァイニー‘Alā’ al-Dīn Juvaynīの『世界征服者の歴史 *Ta’rīḥ-i jahānguṣā*』に関する専論<sup>(4)</sup>で歴史学準博士 (kandidat istoricheskikh nauk / tarix fanlari nomzodi) の学位を取得し、現在は「ヒヴァ・ハン国における歴史叙述の成り立ちと発展」というテーマのもとで博士論文を準備中である。このプロセスにおいて、ウズベキスタンを代表する東洋学者、故アサームディーン・ウルンバエフ (1929-2009年) 博士の直接の研究指導を受けたことは、その資質の開花にとってとりわけ大きな意味をもったに違いない。類いまれな批判精神と確かな史料読解力に支えられたタシェフ氏の史料学的研究には定評があり、その気さくな人柄と厚い人望も相まって、今やウズベキスタンの中堅・若手の東洋学者をリードする存在と言っても過言ではない。じっさい、ここ数年来、氏は東洋学研究所副所長のスライヤー・カリーモフ博士とともに毎年定例のアカデミー会員ウバイドゥッラー・カリーモフ記念若手東洋学者学会の組織・運営を主導するだけでなく、同研究所の上級研究員として後進の指導にも熱意を注いでいる<sup>(5)</sup>。

このほか、氏はドイツのマルティン・ルター大学と東洋学研究所との共同による写本カタログ編纂事業<sup>(6)</sup>にその主要メンバーとして携わったほか、今現在も実施中の日本・ウズベキスタンの中央アジア古文書研究プロジェクト<sup>(7)</sup> (代表者：堀川徹・京都外国語大学教授) で

<sup>(3)</sup> やや一般向けの小さな著作であるが、次の単著もある。N. Toshev, *Shoh Jahon*, Toshkent, 2002.

<sup>(4)</sup> この準博士論文にもとづく研究報告を氏は日本でもロシア語でおこなっており、その日本語要旨は『ユーラシア古語文献の文献学的研究 NEWSLETTER』(No. 9; 2005/05/31) に収録され、インターネット上で公開されている。URL: <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurasia/newsletter/09.pdf>, 閲覧日: 2010年2月28日。

<sup>(5)</sup> タシェフ、カリーモフ両氏は東洋学研究所の若い世代の育成にとりわけ熱心であり、その一環として、おもに方法論上の問題を議論する場としての若手研究者会議の組織にも尽力している。去る2009年11～12月に短期の出張でタシュケントを訪れた訳者は、両氏の好意で第3回の若手研究者会議(12月9日開催)において発表の機会を与えられ、「写本作品を研究する方法について(『ハンへの贈り物』を例に)」と題してウズベク語で報告をおこなった。事前のペーパー校閲を快く引き受けてくれたタシェフ氏からは数々のコメントを頂戴したのみならず、会議の場で研究所の若手研究員たちと忌憚のない意見交換ができたことは貴重であった。

<sup>(6)</sup> 以下はその成果である: *Kratkii katalog sufiiskikh proizvedenii XVIII-XX vv. iz sobraniia Instituta vostokovedeniia Akademii nauk Respubliki Uzbekistan im. al-Biruni*, Sostaviteli: S. Gulomov, Sh. Ziyadov, G. Karimov, Kh. Madraimov, A. Muminov, N. Toshev, Sh. Tosheva, Redaktsionnaia kollegiia: B. Babadzhanov, A. Kremer, Iu. Paul’, Berlin, 2000; *Katalog sufiiskikh proizvedenii XVIII-XX vv. iz sobranii Instituta vostokovedeniia im. Abu Raikhana al-Biruni Akademii nauk Respubliki Uzbekistan*, Sostaviteli: B. Babadzhanov, S. Gulamov, Sh. Ziyadov, M. Kamilov, G. Karimov, A. Muminov, N. Toshev, Sh. Tosheva, Shtuttgart, 2002.

<sup>(7)</sup> 氏は2003年から04年にかけてこのプロジェクトの招聘で滞日した機会に「中央アジア古文書のカタログ化に関する諸問題」と題する研究報告をロシア語でおこなっているが、その日本語要旨も『ユーラシア古語文献の文献学的研究 NEWSLETTER』(No. 5; 2004/2/23) に収録され、インターネット上で

はウズベキスタン側の共同研究者の統括役を務めている。

氏は現在、博士論文執筆の一環としてヒヴァ・ハン国の年代記の研究に重点的に取り組んでおり、2010年中にはその成果の一部として、著名な史家アーガヒー Muḥammad Rizā Mirāb Āgahī の筆になる『君公の事績総覧 *Jāmi' al-vāqi'āt-i sulṭānī*』と題されるテュルク語年代記<sup>(8)</sup>の校訂テキストを出版する予定であり、これは上述の IICAS との共同出版事業の一角を構成している。また、おなじく同年中に氏は訳者との共同で、ロシア統治期最初期のサマルカンドのカーズィー、ムッラー・カマルッディーン Mullā Kamāl al-Dīn がテュルク語で著した弁明書<sup>(9)</sup>の翻刻テキストをイスラーム地域研究東京大学拠点の TIAS Central Eurasian Research Series の一書として刊行する予定である。

タシェフ氏が未公刊写本史料の原典テキストの公刊を研究上の最重要課題の一つとして認識し、それをみずから率先して実行しようと努めていることは注目される。また、研究所に収蔵される写本史料の総合的な整理・把握と研究が依然として不十分であるという氏の指摘は、なるほど傾聴に値する。東洋学研究所のコレクションのなかに眠る膨大な史料群は、氏の言葉を借りれば、「第一級史料の分厚い地層」を含む沃野であり、その未開の部分は、飽くなき探求心と実践的な姿勢を兼ね備えた有為の研究者の手によってこそ開拓されうであろう。拙訳を通じてそのような研究者を一人でも多くこの史料群の開拓へといざなうことができたとすれば、もって望外の喜びとしなければなるまい。

(日本学術振興会特別研究員)

---

公開されている。URL: <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurasia/newsletter/05.pdf>, 閲覧日: 2010年2月28日。また、ヒヴァの法廷文書の言語的特徴やそこに現れるターミノロジーについては、以下の論文がある。N. Toshev, “O iazyke i nekotorykh terminakh khivinskikh iuridicheskikh aktov,” 『中央アジアにおけるムスリム・コミュニティの成立と変容に関する歴史学的研究』(課題番号 14201037)(平成14年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(1))研究成果報告書), 堀川徹(研究代表者; 京都外国語大学教授), 2006年, str. 108–116.

<sup>(8)</sup> この作品の基本的な書誌情報については、たとえば以下を参照: *Sobranie vostochnykh rukopisei Akademii nauk Respubliki Uzbekistan. Istoriia*, Otvetsvennyi redaktor: A. Urumbaev, Tashkent, 1998, str. 200–201; L. V. Dmitrieva, *Katalog tiurkskikh rukopisei Instituta vostokovedeniia Rossiiskoi akademii nauk*, Moskva, 2002, str. 44. 最近タシェフ氏は同作品のタシュケント写本に関して次の専論を著している。N. Toshev, “Jome ul-voqeot-i sultoniynig Toshkent nusxasi: Ogahiy dastxatimi?,” *Sharqshunoslik*, № 13, 2008, 42–50-betlar.

<sup>(9)</sup> この著作の手稿本については、たとえば以下を参照: Dmitrieva, *Ukaz. soch.*, str. 109.